

# グローバル化と感染症——遣唐使と痘瘡，元寇とペスト， コロンブス交換と梅毒，幕末のコレラ そして21世紀のCOVID-19

早川 智

ギリシア語で時を表す言葉にはクロノスとカイロスがある。過去から未来へ絶え間なく流れてゆく悠久の時間がクロノスであり，何らかの出来事でそれまでの価値感や社会が大きく変動するのがカイロスである。わが国の歴史では今年で75年になる第二次世界大戦の終戦，そしてその77年前に当たる明治維新が典型的なカイロスであろう。今回のCOVID-19パンデミックも後世からは日本史におけるカイロスと評価されるに違いない。

本会会員には，私も含めてNHKの大河ドラマ好きの先生が多いに違いない。時代考証やストーリーの矛盾はさておき，1963年の「花の生涯」から今年の「麒麟が来る」で59作の中には戦国時代と幕末が圧倒的に多い。16世紀と19世紀は大航海時代と帝国主義によるグローバルズムに，否応なしにわが国が巻き込まれた時期である。このような変革期にいかにも人々が生きたのかというのはグローバル化の流れがますます加速している現代人の共感を呼ぶのであろう。15世紀末にアメリカ大陸からヨーロッパにもたらされた梅毒は二十年を経ずして我が国に渡来し，猖獗を極めた。

南蛮人は鉄砲やキリスト教とともに南蛮医学をもたらし，宣教師や医師により西洋医学の技術のみならず，ヒポクラテス以来の医の倫理がもたらされた。若い時 医師であったと伝えられる明智光秀はその思想に影響された可能性がある。春秋の筆法を借りれば，これが本能寺の変の誘因かもしれない。古くは7-8世紀に唐から移入した痘瘡は権力の絶頂にあった藤原四兄弟を斃し，疫病治療祈願の大仏建立となった。13世紀にはシルクロードの開通と元の世界帝国が中央アジアに由来するペストを西洋に及ぼしたが，鎌倉武士の奮闘と神風で辛くも元寇を乗り越えた日本はこれを免れている。天然のロックダウンを行うことで台風が日本を救ったことになる。19世紀には麻疹やコレラのパンデミックがあったが，微生物と感染症，免疫，無菌法の発見は幕末明治の日本にほぼリアルタイムで入ってきており，これが今日の我々の臨床の礎となっている。輸入感染症と日本そして世界の歴史について概説したい。

(第55回日本医史学会神奈川地方会 秋季例会・  
日本医史学会9月例会 合同例会)

## 書 評

### 秋田茂・脇村孝平 責任編集 『人口と健康の世界史』

MINERVA世界歴史叢書全16巻が2016年より刊行されつつある。その第Ⅲ期「人と科学の世界史」に含まれる第8巻『人口と健康の世界史』が秋田茂，脇村孝平の責任編集で刊行されたので紹

介して少しく書評を加えたい。

本叢書は若手の歴史学者を含む、それぞれが得意とする専門分野の論文を集成している。

時宜にあった興味深い内容の論文が並んでい

る。第8巻の目次と執筆者を紹介する。

序章 人口と健康の世界史	秋田茂・脇村孝平
第I部 人口の世界史——「人口転換」論を超えて	
第1章 狩猟採取社会の人口学的分析	木下太志
第2章 近代に向かう人口と環境	——ヨーロッパ，特にドイツを中心に—— 村山 聡
第3章 近世日本の人口戦略	友部謙一
コラム1 梅毒	宮崎千穂
第4章 アイルランド大飢饉	——一九世紀北大西洋世界への位置づけ—— 勝田俊輔
第5章 ジェンダーとリプロダクションからみる中国の人口史	——家父長制家族から一人っ子政策へ—— 小浜正子
第6章 現代アジアの少子高齢化	大泉啓一郎
第II部 健康の世界史——「疫学的転換」論を超えて	
第7章 疫病と公衆衛生の歴史	——西欧と日本—— 永島 剛
コラム2 ペスト	竹田美文
第8章 工業化・都市化と結核	花島誠人
第9章 ハンセン病者の社会史	——日本の〈近代化〉の中で—— 廣川和花
第10章 精神医療の歴史学とその射程	——医のまなざしと描写の主体性，バイオとソーシャルをめぐって—— 高林陽展
第11章 眠り病と熱帯アフリカ	——近代医学の描く「文明」と「自然」—— 磯部裕幸
第12章 コレラと公衆衛生	——帝国植民地の比較史—— 千葉芳広
第13章 フィラリアの制圧と20世紀日本の熱帯医学	——風土病の制圧から国際保健へ—— 飯島 渉

第14章 「帝国医療」から「グローバル・ヘルス」へ

——マラリア対策に焦点を合わせて——

脇村孝平

コラム3 感染症対策におけるCDCの大きな存在感  
加藤茂孝

目次からも明らかなように本書は世界史を人口と健康の2つの切り口で論じている。古典的な転換論からでは十分な解釈のできない現在の世界を、歴史的に再考する試みに満ちた論考からなる。大変に興味深い研究・論考が並んでいる。医学の歴史を学んできたものにとって、それよりも大きく広い視点からの社会史・経済史・国際交流史などの政治史そして人類史の論説に触れることは学ぶことが多い。新型コロナウイルスのパンデミックに遭遇している時期に本書は刊行された。責任編集者の秋田茂・脇村孝平は序論において「簡単に国境を超えて、われわれの日常生活にも影響を及ぼす現代の感染症（疾病）への対処を考えるうえでもこうした世界秩序の変容と対応策の担い手の多様化（NGO、NPO等の活躍）を考慮する必要がある」としている。ところが今回のコロナウイルスパンデミックは、そのような担い手では手に負えない、国際政治、国家の対応さきが十分な効果を見せることのできない状況にある。約100年前のインフルエンザパンデミックは第一次世界大戦の中で起こったが、COVID-19は第二次世界大戦後の人口爆発の中で起こったパンデミックである。このコロナウイルスパンデミックがあっても世界人口は増加を続けるだろうと考えられる。しかし、国連人口部の世界人口の低位推計値にも現実感を持たせるような日常がやってきた。健康概念の変換（転換ではなく）も世界的に起こるであろうと考えられる。学術としての史的研究はある意味で世界が平和で、自由な研究に対して寛容であるときでなければ進まないと思われる。そのような意味では本書に盛られた論文はその成果を大きく挙げえた時代の論文といえる。目次にみられるような多彩な切り口による研究・論考が、これからの時代の世界で生かされることを

期待する。各章についての解説や論評は避けるが、現代の史的研究の方法論が駆使された論文が並んでいると言える。確立された世界史的概念を超えた論考がされていると考え推薦したい。

最後に、読者として本書においては、ややとり上げられていることが少ないことを指摘しておきたい。人口と健康を切り口とするのであればそれは公衆衛生の歴史といえる。近代以降については世界的には『戦争による人口損失とその後の増加』の問題と『結核史』『天然痘根絶史』は避けて通れない命題であろう。前者は歴史学の中心にふれる課題であり、後の二つは医学史の大きな命題である。それぞれ多くの社会学や国際政治学としての研究がされているが、学際的研究にはまだ大きく残された領域があると考える。本書の命題の中で総論的にでも、もっと多く触れておいていただきかったと述べておきたい。今後に刊行される予定の世界史叢書の中での充実を期待したい。そして本書を読みながら COVID-19 パンデ

ミックが医学史上の終息した一つのエピソードとなることを祈っている。

なお、『MINERVA 世界史叢書』の『総論「世界史」の世界史』は2016年に刊行された。その中で編集委員会は、「われわれが目指す世界史」として「これまでの世界史の問題点や限界」「オルターナティブの世界史はなにを試みてきたのか?」「二一世紀を見通せる世界史を」をあげている。その第8巻が本書である。『総論』の予告では第8巻は『人と健康の世界史』となっており、本書は『人口と健康の世界史』となった。その意味するところは異なるものと評者には思われる。叢書の他巻にもおおきな期待を持っている。

(渡部 幹夫)

[ミネルヴァ書房刊 MINERVA 世界史叢書8,  
〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1,  
TEL. 075 (581) 5191, 2020年8月, A5判, 365  
頁, 5,500円+税]